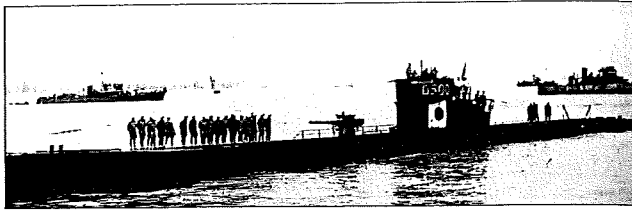


第8潜水戦隊の兵力(昭和17年3月10日新編)

第1潜水隊	3隻(伊16、伊18、伊20号潜水艦)
第3潜水隊	3隻(伊21、伊22、伊24号潜水艦)
第14潜水隊	4隻(伊27、伊28、伊29、伊30号潜水艦)
旗艦・伊10号潜水艦	

\*伊10、伊21、伊29、伊30は小型水偵を搭載、その他は特殊潜航艇の搭載が可能



ドイツは日本海軍にインド洋での交通破壊戦を強く希望し、最新鋭のIXC型Uボート(写真)を譲渡した。日本への回航途次、ペナンを出航する呂500号の姿である。

# 日本海軍の印度洋作戦

インド洋作戦は日独両国の目標が一致し、しかも両国海軍が実行できると同時に、イギリスの屈服に結びつき得る作戦であった。しかし、実際には何ら成果を挙げることなく破綻してしまっ

## ミッドウェー海戦まで

初期作戦は予想を上回る順調を示し、マレー、ジャバを攻略した陸軍はビルマに兵を進め、昭和十七年(一九四二)三月八日にはランゲーンを占領した。一方、海軍も二月九日には南雲機動部隊の一八八機が漳州北部のダーウィンを空襲し、駆逐艦一隻を含め輸送船など七隻を撃沈、港湾施設や補給施設に大打撃を与えた。

潜水艦部隊は開戦から南雲機動部隊のセイロン攻撃前までにインド洋で二隻を失ったが、船舶四一隻を撃沈し九隻を撃破する戦果をあげた。また、マレー半島西岸のペナンには一月二〇日に第十一潜水艦基地が開設され、三月一〇日には水上偵察機、特殊潜航艇搭載の新鋭潜水艦四隻を含む一一隻からなる第八潜水戦隊が新編された。

続いて四月には赤城、蒼龍など

空母五隻からなる機動部隊がインド洋に出撃、四月五日にコロ

ボ、九日にトリノコマリを強襲して空母ハーミズ、重巡洋艦二隻、駆逐艦一隻を撃沈し、イギリス東洋艦隊をマダガスカルに撤退させた。さらに、南雲部隊の作戦に連動した第七戦隊、第三水雷戦隊、第四潜水戦隊などのマレー部隊がベンガル湾方面で船舶二隻を撃沈し、八隻を撃破した。

また四月から六月にかけて、甲先遣部隊の特殊巡洋艦二隻と潜水艦五隻(一隻は特殊潜航艇搭載、イギリス派潜水艦)によるアラビヤ半島やフリカ沖の海上交通破壊作戦が行なわれた。五月三日には特殊潜航艇がデ

特殊潜航艇がインドネシア港内で宿舎船一隻を撃破した。

## ガダルカナル撤退まで

日本海軍がミッドウェーで大敗した太平洋方面の悲報とはうらはらに、アフリカ戦線では一九四二年(昭和十七)五月二十七日からロ

ンメル機甲軍団の快速撃が始まり、六月二日には北アフリカ戦線の天王山ともみられたトブルクを占領、その二日後にはエジプト領内に進撃していた。このように北アフリカの戦況が有利に展開すると、陸軍はむか

一方、海軍も七月七日に「第二艦隊及第三艦隊ヲ基幹ト致シマス

兵力ヲ以チマシテ印度洋中部、敵情ニ依リマシテハ其一部ヲ更ニ西部印度洋方面ニ進出セシム」ますと、連合艦隊の主力を投入するインド洋作戦の実施を上奏した。そして七月末には第一南遣艦隊司令長官大河内伝七中将に対し機動作戦「B作戦」の実施を指示、七月三二日には第七戦隊(重巡二隻、第十六戦隊(軽巡二隻)、第三水雷戦隊(軽巡一隻、駆逐艦一八隻)などがマレー半島西岸のメルギーに進出した。しかし、これらすべての作戦はアメリカ軍のガダルカナル島上陸にともない中止のやむなきに至った。

このため、実際にインド洋に展開した兵力は六月上旬までは潜水艦一〇隻、仮装巡洋艦二隻で、その後は、ミッドウェー海戦で一八隻を失い、第十四、第三潜水隊の五隻と伊八号のみが派遣された。これにともなって、戦果のほうも八月から一月までに撃沈一〇隻、撃破二隻に低下。一月中旬には戦局の悪化から第三潜水隊が引き抜かれ、戦果は撃沈二隻にまで低下してしまっ

た。ガダルカナル以後

緒戦では連続的攻勢作戦を展開した海軍も、ガダルカナル争奪戦に敗れると作戦方針を転換した。昭和十八年一月には、インド洋に兵力を指向して、今後は一層積極的に海上交通破壊作戦を実施する旨をドイツに通知。三月五日には「第三段作戦」が発動され、インド洋における海上交通破壊戦の強化が指示された。しかし、一八年三月以降、三隻が修理のために内地へ帰還すると、インド洋で作戦中の潜水艦はわずか二隻にすぎなくなった。

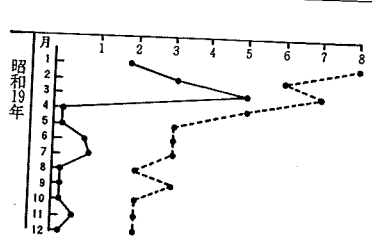
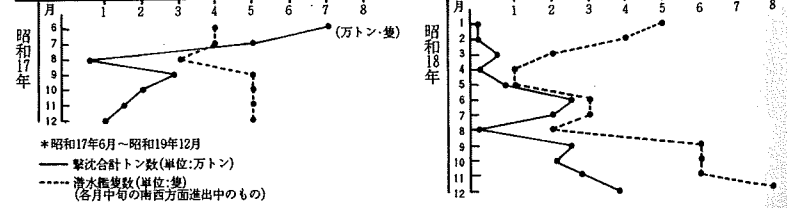
そこで、連合艦隊は四月一七日、第八潜水戦隊に伊号潜水艦八隻を追加し、さらに一〇月から一月にかけて新造の二隻を加え、年末には二隻(うち二隻はドイツ派遣潜水艦)に増勢された。これによって戦果も逐次増加するようになり、九月二四日から一月一八日まで七隻、一月一七日から翌一九年三月一九日まで一

大本営は「A作戦要領(インド洋防衛要領)を指示した。しかし、二月下旬にはアメリカ軍が

ズルバート諸島に上陸、昭和十九年一月から内南洋方面に対する本格的攻勢が始まったため、インド洋に配備していた兵力はそれと引き抜かれていった。一八年末に一隻に達していた潜水艦部隊も翌一九年四月末には四隻に減少。八月二二日には新鋭の呂号潜水艦二隻が増強されたが、一〇月上旬に三隻が内地へ帰還した結果、インド洋の潜水艦は呂号潜水艦二隻に減少してしまっ

た。このため戦果も、一九年三月二二日から四月二六日まで四隻、六月から七月はわずか二隻に減少。さらに、六月にはアメリカ軍がサイパンへ上陸、一〇月にはマッカーサー軍のレイテ上陸など情勢が急速に悪化したことから、二〇年一月下旬には呂号潜水艦も引き抜かれ、同年一月二〇日には戦時編成の改編にともなって第八潜水戦隊が解散し、ここに、日本海軍のインド洋交通破壊部隊は消滅した。

日本潜水艦戦果の推移



\*大河内伝七(おほこうちてんしち)＝海軍兵学校37期、昭和17年7月から第一南遣艦隊司令長官。  
\*仮装巡洋艦＝戦時に商船を改造し、大砲などを搭載したもの。正式には「特殊巡洋艦」というが、「補助巡洋艦」とも呼ばれた。

\*ミッドウェー海戦＝昭和17年6月5、6の両日、ミッドウェー島周辺海域で日本の機動部隊が強襲し、日本海軍は空母4隻を失った。  
\*杉山元(すぎやまはじめ)＝陸軍士官学校12期、昭和15年10月から1945年まで、日本海軍は空母4隻を失った。

文・平間洋一